

# 闇の中から来た女

ダシール・ハメット  
船戸与二訳

Dashiell Hammett

W

闇の中から来た女



ダシール・ハメット  
船戸与一訳 集英社

WOMAN IN THE DARK  
by Dashiell Hammett

Copyright © 1933 by Liberty Publishing Corporation  
Copyright © renewed 1960 by Dashiell Hammett  
Introduction copyright ©1988 by Robert B. Parker.  
Japanese translation rights arranged with Dashiell  
Hammett, c/o The Lantz Office Inc., New York through  
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

闇やみの中なかから来た女おんな

一九九一年四月二十五日 第一刷発行

著者 ダシール・ハメット

訳者 船戸与一

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

一〇一五〇 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇  
電話 編集部 (〇三) 三二三〇一六〇九四

販売部 (〇三) 三二三〇一六三九三

製作課 (〇三) 三二三〇一六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

©1991 Shueisha

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。  
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

# 闇の中から来た女



## 目次

### 序文

ロバート・B・パーカー

5

### 第一章

飛ぶ女

19

### 第二章

追われるふたり

83

### 第三章

笑う女

143

### 訳者解説

船戸与一

201



## 序文

ロバート・B・パーカー

『闇の中から来た女』は一九三三年の四月八日、十五日、二十二日の三回にわたって、かの『リバティ』誌に連載されたものだ。つまり、ダシル・ハメットが一作を除き、その筆を断ってしまったあとに発表されたのである。作品の仕あがりぶりはいかにもハメットらしい。型破りな名まえ（ブラジル）、簡潔ですっきりした会話、無頓着で冷ややかな警官たち、庶民たちのそれ相応の暮し（もっとも、一九三三年当時、富裕階級に不信を感じてたのは何もハメット

ひとりに限ったことではないが、そういうものがこの作品を構築してるのだ。そして、変転きわまりない人生にたいするハメットの見解もまた合わせて窺うことができる。

『マルタの鷹』のなかで、サム・スPEEDがジョエル・カイロを待つあいだ、ブリジット・オシヨーネシーに向かって探偵としての過去を語るくだりがある。そのさわりの部分をここに紹介しよう。抜粋した文章はもちろんハメットのものだが、抜きだして簡略化したのは私である。

ある日、タコマでフリットクラフトという名まえの男が昼食を摂りにじぶんの経営してる不動産屋の事務所を出ていったきり帰ってこなかった……。

「そんなふうにもその男は消えてしまったんだ」スペードは言った。「手を広げると握りこぶしは消えちまう、ちょうどそんな感じでね……さてと、はなしをつづけよう。その男が消えたのは一九二二年のことだ。一九二七年にはおれはシアトルにある大きな私立探偵社にいた。フリットクラフトの細君がそこに訪ねてきた。スポーケンで夫によく似た男を見かけた人がいると言ってな。おれはさっそく出かけていった。そしたら、フリットクラフトがそこにいたんだよ、まぎれもなくフリットクラフトが……」

「フリットクラフトに何が起きたかというと、つまり、こういうことだったんだ。昼食に出かける途中に、建築中のまだ骨組みだけのオフィス・ビルのしたを通りかかった。そしたら、八階か十階あたりから鉄の梁はりが落ちてきて、足もとの歩道にすごい勢いでぶちあたったんだとき。そいつはぎり

ぎり鼻先をかすめたが、体には触れなかった。しかし、粉々になった舗石のかけらが跳ね飛んできて、それが頬にあたったと言うんだ。皮膚の一部を殺ぎとられた程度のけがで済んだが、おれが会ったときも、まだその傷跡が残ってた。そのときのことを話しながら、フリットクラフトはまるで愛惜しむようにその傷跡を撫でていたよ。もちろん、やつこさんは恐怖で身が縮んだらしいが、実際の恐怖よりもべつの衝撃のほうが大きかったと言うんだ。だれかがじぶんの人生の蓋を開け、なかのからくりを覗かせてくれたような気がして体が震えたらしい」

それまでのフリットクラフトはよき市民であると同時に、よき夫でありよき父親でもあった。それは決してはたからの強制によるものじゃなく、ただ単に周囲と歩調を合わせていくことで、何よりも安らぎが得られるタイプだ

ったからだ。そんなふうに育てられてきたし、フリットクラフトが知ってる人間もみんなそうだった。じぶんの熟知してる人生はきちんと秩序の保たれた健全で確実なものであるはずだった。ところが、落下してきた一本の鉄材がふいに教えてくれた。人生は根源的には決してそんなものじゃないことを。よき市民であり、よき夫であり、よき父親であるじぶんも事務所からレストランへ行く途中で、鉄材の落下事故でこの世から消し去られることもあるのだ。人間とはそうしたでたらめな偶然によって死ぬものであり、そのまったくの偶然が見逃してくれてるあいだだけ生きてるに過ぎない。フリットクラフトはそのことをそのとき悟った。

フリットクラフトのこころを掻き乱したのは基本的にはそういう運命の不公平さではなかった。最初の衝撃から冷めると、この点は受け入れることが

できたのだ。胸をどうしようもなく騒がせたのはその後の新たな発見によつてだった。秩序正しい暮しは人生に歩調を合わせるどころか、逆に人生から足を踏み外してしまうことに気づいたのだ。落下した鉄材から二十フィートも行かないうちに、ちらっとかい見た人生のからくりにじぶん自身を適応させないかぎり、こころの安らぎは戻ってこない。そのことがわかつて胸が顫えた。しかし、フリットクラフトは昼食を終えたときに、その適応方法を見つけた。鉄材の落下という偶然のなりゆきで人生は終わってたかも知れないのだ。それなら、同じように偶然のなりゆきで人生そのものを変えてみよう。フリットクラフトはそう思った。人並みに家族を愛している。だが、充分に暮していけるだけのものはもう残してあるのだ、じぶんが消えてしまっても家族が耐えきれないほどつらい思いをすることはあるまい。フリットクラフトはそう考えた。

「その日の午後、フリットクラフトはまずシアトルに向かった」スピードはつづけた。「そこから船でサンフランシスコに渡った。二年間ほどそのあたりを放浪してから、ふたたび北西部に舞い戻ってきたんだ。それから、スポーケンで世帯を持って落ちついた。二度目の細君は最初のかみさんと顔つきがそれほど似てるってわけでもなかったけど、それでも相違点より類似点のほうが多かった。ほら、よくいるだろう、ゴルフやブリッジの腕もまあまあ、サラダのレパートリーを増やすのが好き、そういうタイプの女さ。フリットクラフトはじぶんのやったことをすこしも後悔しちやいなかった。きわめて道理にかなったことだと思ってるらしかった。じぶんがタコマで棄ててきたのとそっくりな生活にいつのまにか嵌<sub>は</sub>まってることにすら気づいてないようだった。しかし、おれが気に入ってるのはそこなんだろう。フリッ

トクラフトは鉄材が落ちてくることにいったんじぶんを適応させた。だが、もう落ちてこないとなると、今度は落ちてこないことにじぶんを適応させたというわけさ」

この挿話は一見、目的の人物を待つてゐるあいだの暇つぶし、むだばなしのように読者には映るかも知れない。だが、これは断じてそんなものではないのだ。これこそがスピードの行動を駆り立てる原動力なのである。そして、この非情なまでに不条理な世界という見解はハメットのほぼ全作品に共通してると言ってもよからう。

ハメットの作品に登場する男たちはみな本書のブラジルに似ている。探偵であつたり、そうでなかったりするにしても、人生の受け取りかたも、何が起こ

ろうと動じないところもブラジルやスパードと同じだ。だれもが友人と呼べる人間はほとんどなく、社会における確固たる地歩ちほもない。家庭も持たない。彼らが順守するのは法律ではなく、もっとべつのもの、強しいて呼ぶなら秩序、物ごとはかくあるべきだというセンスである。多くの点から考えるに、特異な存在に見えても彼らは実際にはごくふつうの男なのだろう。

一部ではハメットの作品をマルキシストの立場から捉えることが一種の流行になってる。そうした読みかたをするには、単にハメットの作品を齧かじってみるだけではなく、じっくりと咀嚼そしやくすることが必要だろう。だが、私にはマルキシストたちがハメットをきちんと読みこんでとは思えない。

それはともかくとして、ハメットの作品に登場する男たちはどんな苦境にも動じないように見える。死をも怖れない。金やセックスの誘惑にも惑まどわされな  
い。苦痛を超越し、残虐さに驚かない。彼らは幻想を抱くことがないのだ。と

くに本書のブラジルは計り知れない平静さのなかにみずからを包みこんでるように見える。あたかも騒ぎ立てるほど重大なことは何ひとつないんだと言わんばかりに。

そうはいっても、ハメットの作品に登場する男たちはどれも胸の裡に情熱を秘めてる。ワレ関セズ式の無関心と紙ひとえの厳しい自己規制のもとでふつつと燃えているのだ。この情熱はたいてい言葉よりも行動で示される。そして、行動は概して実に荒々しい。

『闇の中から来た女』はハメットのどの作品よりもラヴ・ストーリーの色彩が濃い。この作品が発表されたのはリリアン・ヘルマンとの終生の関係がはじまった二年ほどあとであり、また最後の作品『影なき男』が出版される一年まえにあたる。そして、思いがけない結末はハメットには珍しく感傷的で、ブラジルとルイーズがズット幸福二暮スだろうことを暗示している。